

鉄斎と蓮月

平成22年1月8日(金)～3月14日(日)

前期—1月8日(金)～2月7日(日) 後期—2月10日(水)～3月14日(日)
 10時～16時 月曜日休館 但し1月11日(月)は開館 翌日休館



1 双鶴図 大田垣蓮月筆



18 大田垣蓮月肖像 富岡鉄斎筆

鉄斎と蓮月——二人が初めて出会った正確な年紀は定かでない。鉄斎晩年の記録によると「予尼をしる時ハ、尼六十余リ、余は廿歳之比なるべし」(筆録「愛日惜時記」)とあり、別には鉄斎15歳、蓮月60歳頃といい、あるいはそれ以前ともする説もある。いずれにしても鉄斎はまだ幼名猷輔(うつけ)を名のっており、蓮月は不遇の前半生を乗り越え、女流歌人として、蓮月焼の造り手としてすでに世に知られていた。

聖護院村 京都三条衣棚で法衣商を営む鉄斎の父富岡維叙(七代十一屋伝兵衛)は、店とは別に聖護院村に住宅を持っていて、その近くに「屋越の蓮月」と綽名される蓮月が越してきた。隣人のよしみで維叙は蓮月と昵懇になり、ある時、転居の相談を持ちかけられる。維叙は心性寺住職の原垣山とは相識で、維叙の仲介により蓮月は北白川の心性寺に寄寓することになる。この地には蓮月が私淑する小沢蘆庵(1723～1801)の墓があった。

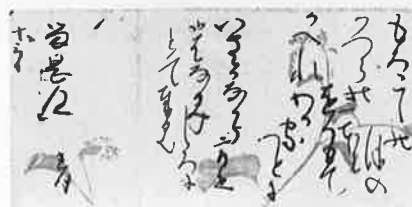
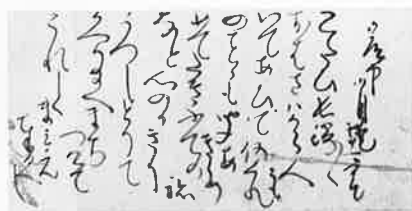
そこに父の命により学僕として同居したのが若き日の鉄斎である。陶器を作り生活する尼のために、陶土を搬入し、出来上がった急須や茶碗などを粟田の窯元に運ぶことを手伝った。安政3年(1856)に鉄斎の父維叙が没すると、同居はやむなく終わりを迎えるが、以後20年、蓮月は鉄斎の行く末をたのもしげに、深い愛情をもって見守った。鉄斎宛の書簡には、再三にわたり「何事も御自愛あそばし、御機嫌よく御長寿あそばし、世のため人のためになることを、なるべきようにして、心しづかに、心長く御いであそばし候ようねがい上参らせ候」などと諭し、勤王の志高く、国事に奔走し血気にはやる鉄斎の気持ちをなだめている。蓮月は常々とにかく長生きすることが一番大切であると人に語り、その教えを受けた鉄斎は89歳の長寿を全うし、晩年に画業において大輪の花を咲かせたことは周知のことである。

文久元年頃、鉄斎は長崎に遊学した。数ヶ月の滞在期間中に鉄翁祖門、木下逸雲、小曾根乾堂などの文人に面会し、すぐれた明清画を見る機会にも恵まれた。その旅立ちの時、蓮月は鉄斎の身を案じつつも激励する「もろこしの月のかつらの一本も をりもてかへれわが家づとに」の和歌を贈り、学資を与えている(No.5)。また明治7年に敢行された北海道旅行の折には「きみのゆくえぞのちしまのあら波も をりしづまりてまちわたらん」の和歌を短冊にしたためた(No.56)。こうして時々贈られた蓮月の筆あとを、鉄斎は生涯大切にしていた。

長崎から戻った鉄斎は、文久2年、聖護院村の蓮月の旧居に私塾「誠之塾」を開き、その翌年に蓮月は西賀茂に移っている。この頃鉄斎は、有為の者は結婚してはならぬとの若狭空印寺瑞芝和尚の教えから、妻帯することに頑なであったが、蓮月の助言により、慶応3年に同じ聖護院村に住んでいた画家中島華陽の娘達(明治2年没)と結婚をした。

神光院茶所 慶応元年、蓮月は西賀茂神光院茶所に居を移した。この地を大変気に入って、以降は屋越することもなく、幕末の動乱期の世相に心を痛めながらも俗世をさげ、晩年の10年を信仰や諸芸に専念した。32歳になった鉄斎は、『平安人物志』(慶応3年版)の儒家と詩の部に名が掲載される。こうした学者としての成長を蓮月は喜んだであろうし、鉄斎はすでに天保9年版から掲載されていた蓮月と同じ人物誌に名を連ねたことを誇りに思ったようである。さりながら、鉄斎はやっと名を知られはじめた学者であり、私塾の収入だけでは思うにまかせず、画を描いて生計を立てていた。蓮月と鉄斎の合作(No.37～50)が多くなるのはこの頃である。蓮月は和歌の揮毫を依頼されるとそれに添える画を描かせて、鉄斎の身が立つように配慮した。

明治5年(1872)、鉄斎は佐々木ハル(通称春子)と再婚し、翌年には長男の謙蔵が生まれた。この時蓮月は、養母のかたみの襦袢を蒲団地にして贈っており、謙蔵の誕生



を手放して喜んだ。諸国を遊歴し、文人の理想である「万里の路を行く」ことを信条とした鉄斎は家をあけることが多く、蓮月は留守宅を守る春子に宛てて細やかな心遣いに満ちた書簡を度々送っている。春子が生涯、和歌や手すさびの作陶にいそしみ、鉄斎との合作 (No.109) を楽しんだのも、蓮月を慕ってのことであろう。

蓮月の終焉 明治8年12月10日、蓮月は神光院茶所にて85歳で没した。無用の者が消えてゆくのに多用の人を煩わすにはおよばないから、だれにも知らせてくられるな、ただ、死んでしまったら富岡にだけ伝えてもらいたいとかねてより周囲の人たちに頼んでいた。蓮月が亡くなった当日、鉄斎は親交のあった松浦武四郎 (1818~1888) に書簡を送っている (「やまと錦」、松浦武四郎記念館蔵)。そこには、「先月来蓮月老人不快之處、今日午後四時帰西ニ及候、嗚呼海内之名物無之相成可惜、乍併日出度終焉又可賀歎」とあり、蓮月の死を惜しみながらも大往生に安堵し、また「小生モ二三日隔見舞ニ罷こし、一昨日妻兄共ニ罷こし、是か暇ト相成り候」と最期を見とれなかったことを記している。そして「老人ノ終焉の口号、霧ばかり心にかかるちりもなし 今日をかぎりの夕ぐれ空、明日ハ後山に葬式のつもり也」と辞世の歌を伝えている。遺体を包む白木綿の風呂敷には十年ほど前、蓮月に乞われて鉄斎が描いた蓮と月の絵に「ねがはくはのちの蓮の花のうへに くもらぬ月をみるよしもがな」との和歌がしるされていた。

翌日蓮月は神光院西方の小谷墓地に葬られた。墓の傍らに植えられた一本の桜は、大樹となった今も寄り添うようにあり、瓜形の小さな鞍馬石の墓には、鉄斎の筆で「大田垣蓮月之墓」とある。

蓮月追慕 明治10年3月、鉄斎は尼の伝略を自ら撰文し賛に識した《大田垣蓮月肖像》(No.18) を描いた。一説に、この図は蓮月が在世中に描かれたもので、鉄斎はこれに歌賛をもらおうと携えたところ、「富岡お前何をすにや、この皺クチャ婆々の画像を遺して、後世にまで恥かかせんとにや、悪戯にも程こそあれ」とひどくたしなめられ、お蔵入りになった。それに鉄斎は賛を書して完成させ、供養のしるしとしたという。真偽のほどは明らかでないが、鉄斎の蓮月に対する追慕の念を伝えるおもしろい逸話である。蓮月没後も大切に想う心は変わりなく、

明治30年代の筆録には「8月12日、例年の如く西加茂村神光院に蓮月の墓を弔う」との記述があり、毎年盂蘭盆前の8月12日には神光院の和田智満和上を訪ね、蓮月の墓参りをするのが恒例となっていたようだ。

大正10年頃になると、『蓮月尼全集』(昭和2年)を刊行すべく、村上素道らによる蓮月の顕彰活動が本格化する。鉄斎は蓮月が生涯口にしなかったことを、膝下にいた自分が語ることは憚っていたが、次世代の人々が丁寧に調査し、真実を伝えることには全面的に協力した。この頃には、生存中の尼を知るものは鉄斎唯一人になっていたという。こうした機会に、鉄斎はゆかりの愛蔵品を再び整理し、それぞれに箱を新装して「蓮月幽居図」や文人たちが詠んだ蓮月を称賛する詩文を外箱に録した。蓮月を称賛する大家の詩文 (No.54、55、56) については、「四方の大家より寄贈せし詩文集の如きも、称賛の言詞あるものは秘して人に示さず。後に列ぬる鶴梁、星巖、芷堂等各家の詩文も、尼が没後篋より捜し出して始めて見たる位なり」と語り、尼の謙遜な人柄を偲んでいる。大正12年、鉄斎は自身の米寿内祝として、市内貧困者のために壺千円を京都市に寄付し、関東大震災に義金壺千円を贈った。慈善活動は蓮月が努めていたことであり、数十年の歳月が流れても、若き日に受けた薫陶は深く胸に刻み込まれていたことが知られる。

大正13年11月10日、89歳の鉄斎は西加茂神光院で、蓮月の五十回忌法要を営んだ。翌12月の祥月命日に鉄斎宅を訪ねた若き友人正宗得三郎 (1883~1962) は、画室に蓮月の鶴の画に和歌の賛がある軸、すなわち《双鶴図》(No.1) が掛けられていたことを記している。鉄斎が逝去したのはその年の大晦日で、節目となる五十回忌を終えたわずかひと月半後であった。『蓮月尼全集』が成る日を心待ちにしていたが、



37 煎茶図

その刊行は間に合わなかった。

鉄斎の煎茶 蓮月の作陶は、粟田口の一老女の勧めによってはじめられたと言われるが、実際のところは蓮月の居所が岡崎にあった頃、上田秋成らの影響を受けた当時の文人たちに広がっていた煎茶に触れたことがはじまりと考えられている。尼のつくる煎茶器は中国趣味的な要素が薄く、自詠の和歌を釘彫りで施した和様化されたものであるのに対し、鉄斎の煎茶は、文房に茶を煮る文人としての煎茶趣味であった。青年鉄斎は蓮月を通じて多くの志士や文人と知り合い、彼らが嗜んでいた煎茶への理解を深めていった。

慶応3年、鉄斎は「宜興瓷壺譜」「文房清約図」「桑苧遺韻」から成る煎茶書『鏡荘茶譜』を刊行した。「宜興瓷壺譜」は明周高起の『陽羨茗壺系』の和訳、「文房清約図」は文震亨の『長物志』にある「清齋位置」の注釈、「桑苧遺韻」は『石山齋茶具図譜』の唐人茶壺の図と形式の説明、『枕山樓茶略』に掲載される煎茶飾りの様子を図示し、最後に『陽羨茗壺系』以降の清代の茶壺の名手の略伝を紹介するものである。こうした内容からは、鉄斎が日本で享受された煎茶趣味ではなく、その原典である中国文人茶に立ち戻ろうとしていたことがわかる。原典主義は、鉄斎の学問や芸術に一貫する姿勢であった。

ところで、鉄斎は本書に続く煎茶書を著していない。自身の学問を文筆によって表現することよりむしろ、書画を以て具現化してゆくことを模索したのである。古来より中国でもてはやされた名品の茶壺図を『陽羨茗壺系』に拠って描く《陽羨清韻画冊》(No.15)《陽羨茗壺帖》(No.16)、茶器や茶の生産過程を先人の画に倣う《景德鎮陶窯図巻》(No.22)《菟道製茶図・粟田陶窯図》(No.11)などからは、煎茶史全般への興味が窺える。世界最古の茶書『茶経』を著した陸羽(No.32、33)や「茶歌」で有名な玉川子廬全(No.29)、茶詩を多く詠んだ蘇東坡(No.31)ら中国の喫茶愛好の文人を崇敬し、彼らを題材にした画を晩年まで制作した。

一方、近世の文人たちによって大成された日本の煎茶趣味も、鉄斎の興味の範疇であった。とりわけ日本煎茶道の祖売茶翁高遊外に敬愛の念を示した。一杯の茶を売り、一つの心の啓蒙を計った売茶翁の生き方を、画を以て法を説くことを信念とした自身の生き方と重ね合わせたのだろう。《通天紅葉図》(No.19)、《売茶翁対客言志巻》(No.20)、《高遊外売茶図》(No.26)といった売茶翁に取材する多くの作品を描き、晩年には友らとともに追悼茶会を催し、売茶翁が所用した諸道具に憧憬の念を抱いて『売茶翁茶器図』に収録された茶器図に倣い、茶具の制作を娛しんだ(No.110)。

本展では、蓮月と鉄斎の合作をはじめ、鉄斎が終生身近に置き愛玩した蓮月作品を中心に展示し、併せて蓮月によって導かれた鉄斎の煎茶の世界も紹介する。互いに敬い、深い精神をもって結ばれたふたつの異なる個性を取り合わせることで、その表現における対比と融合を楽しんでいただきたいと考えている。

(柏木知子)



110 傳楽書売茶式器局

[主な参考文献]

村上素道編『増補 蓮月尼全集』(初版蓮月尼全集頒布会 思文閣出版 2006)、杉本秀太郎『大田垣蓮月』(初版淡交社 桐葉書房 新版2004)、是澤恭三ほか『蓮月』(講談社 1971)、徳田光圓『大田垣蓮月』(講談社 1982)、『大田垣蓮月』(京都府立総合資料館 1984)。

富岡益太郎編『富岡鉄斎年譜』(鉄斎研究所『鉄斎研究』第4～9号 1971-72)、小高根太郎『富岡鉄斎』(吉川弘文館 1985)、奥田素子「鉄斎と煎茶の世界」(『鉄斎と煎茶の世界』鉄斎美術館 1991)、仙一輝「鉄斎と蓮月の旅」(『煎茶への旅』大阪書籍 1985)、大槻幹郎『煎茶文化考—文人茶の系譜—』(思文閣出版 2004)、北海道開拓記念館『松浦武四郎 時代と人びと』(北海道出版企画センター 2004)。

〈蓮月・鉄斎略年表〉

年号	西暦	年齢	大田垣蓮月	年齢	富岡鉄斎
寛政3	1791	1	1月8日京都河原町丸太町三本木に生まれる。出生名は誠(のぶ)。生後十日程で京都知恩院の寺侍大田垣光古の養女となる。		
寛政10	1798	8	丹波亀山城に武家奉公に出る。武芸・和歌などを学ぶ。		
文化4	1807	17	奉公を終え、養家に戻る。養父光古の養子、望古と結婚。		
文化5	1808	18	長男鉄太郎出生、同年没す。		
文化8	1811	22	長女出生、すぐ没す。		
文化12	1815	25	次女出生、数日後没す。夫望古と離縁、同年望古没す。		
文政2	1819	29	養父光古が迎えた養子古肥と結婚。三女生まれる。		
文政3	1820	30	養父光古、家督をゆずり隠居。		
文政6	1823	33	夫古肥没す。剃髪して蓮月と改める。養父光古も西心と改める。養父は古教を養子に迎え、家督を継がせる。蓮月、西心、三女は知恩院山内真葛庵へ別居。		
文政8	1825	35	三女没す(7歳)。		
天保3	1832	42	養父西心没す(78歳)。真葛庵を出て、岡崎村に移る。この頃より陶器を作りはじめる。天保年間に松村景文に絵をまなぶ。		
天保7	1836	46		1	12月19日京都三条通新町に生まれる。通称は猷輔。後、百錬を名とする。字は無倦、号は鉄斎。
天保9	1838	48	この頃、香川景樹に入門し、和歌を学ぶ。「平安人物志」の女流の部に名が掲載される(天保9年版、嘉永5年版)。	3	
嘉永2	1849	59	六人部是香に入門、以後十数年間和歌の添削を受ける。	14	
嘉永3	1850	60	飢饉救済のため、奉行所を通じて三十両を喜捨。	15	野之口(大国)隆正に国学、岩垣月洲に漢学を学んだのはこの頃か。
安政1	1854	64		19	この頃より絵を学んだと考えられる。窪田雪鷹、大角南耕に師事。南画家の小田海徳、大和絵の浮田一憲らと往来。
安政3	1856	66	北白川心性寺に寄寓。	21	この頃、蓮月の寄寓する心性寺に同居し、尼の製陶の手助けをする。父維叙死去(53歳)。
安政5	1858	68		23	分家。安政の大獄起こり、先輩友人の多くが捕えられる。
安政6	1859	69		24	詩文を羅漢慈本に学ぶ。
文久1	1861	71	鉄斎長崎遊学に際して、和歌と学資を与える。	26	文久年間に長崎に旅行し、数カ月滞在。
文久2	1862	72	聖護院村の住居を鉄斎に譲り、翌年西賀茂に移る。	27	聖護院村の蓮月尼旧居に私塾「誠之塾」を開く。
元治1	1864	74	神光院を訪れ、和月天心・智満と親交を結ぶ。	29	この頃蓮月より妻帯をすすめられる。
慶応1	1865	75	神光院茶所に移る。	30	「孫呉約説」の序文を書く(翌年出版)。
慶応3	1867	77	和月天心、鳩居堂熊谷直孝等と飢饉救済を行う。「平安人物志」の和歌と良工の部に名が掲載される。	32	画家中島華陽の娘達と結婚(明治2年没)。煎茶書「鉄莊茶譜」出版。「平安人物志」の儒家と詩の部に名が掲載される。
明治1	1868	78	『蓮月式部二女和歌集』出版。	33	長女秋誕生。中井竹山著『草莽危言』を校訂出版。
明治3	1870	80	歌集『海人の刈藻』(鉄斎上梓、近藤芳樹序)。	35	「蓮月庵集」の出版を計る。
明治5	1872	82		37	佐々木ハルと結婚。
明治6	1873	83	鉄斎息謙蔵のために、養母のかたみの襦袢を蒲団地に贈る。	38	2月長男謙蔵誕生。6月漆川神社権禰宜に任命されるが、地位について不満があり、辞表提出。
明治7	1874	84		39	北海道、東北、関東各地を巡遊。
明治8	1875	85	12月10日神光院茶所にて逝去。墓所は西加茂鎮守庵町小谷墓地。鉄斎の文字で「大田垣蓮月墓」とある。	40	信州伊那郡浪合村の尹良親王の旧跡を弔い、飯田・甲府を経て富士山に登る。
明治9	1876			41	5月奈良石上神社少宮司。12月大阪大鳥神社大宮司。
明治10	1877			42	2月堺行在所で天皇に拝謁。7月正七位。
明治14	1881			46	10月兄伝兵衛敬憲の死去により、帰洛。
明治15	1882			47	室町通一条下ル薬屋町に転居。没年まで在住。
明治23	1890			55	京都美術協会委員。
明治27	1894			59	京都市美術学校嘱託(修身・考証学)。
明治30	1897		牧野一平編『蓮月歌集』出版。	62	日本南画協会発会、商議員。
明治43	1910			75	息謙蔵(京都帝国大学文科大學講師)北京へ出張、鉄斎のために貴重な書籍、文房具などを数多く持ち帰る。
大正6	1917			82	6月帝室技芸員となる。11月京都市公会堂で、竹内栖鳳、上村松園等と皇后の前で揮毫。
大正7	1918			83	12月23日長男謙蔵死去(46歳)。
大正8	1919			84	9月帝国美術院会員となる。
大正10	1921			86	画集『掃心図画』出版。
大正11	1922			87	書庫「魁星閣」、続いて画室「無量寿仏堂」落成。正五位。画集『百東坡図』出版。
大正12	1923			88	米寿内祝として、市内貧困者のために京都市に壹千円を寄付、関東大震災に義金壹千円を送る。住居を新築、「曼陀羅窟」と名づける。
大正13	1924			89	画集『米寿墨戯』出版。西加茂神光院で、蓮月尼五十回忌法要を営む。12月31日逝去、享年89歳。翌年、従四位。法名、無量寿院鉄斎居士。

《出品目録》

[書 画]

番号	名 称	制 作 年	法 量	員 数	材質・彩色
大田垣蓮月(鉄斎旧蔵品)					
1	双鶴図	明治元	1868	109.6×39.4	一 幅 紙本 淡彩
2	茄子図	明治5	1872	31.0×45.4	一 幅 紙本 墨画
3	亀図	江戸末-明治初		42.0×36.8	一枚(袱紗) 絹本 墨画
4	大田垣蓮月和歌二首貼交	慶応3	1867	34.6×14.0 19.4×16.4	一 幅 紙本 墨書
5	大田垣蓮月書簡 富岡鉄斎宛	文久年間		16.4×65.0	一 幅 紙本 墨書
6	大田垣蓮月和歌短冊のうち	江戸末-明治初			紙本 墨書
富岡鉄斎					
7	蔬菓図	慶応2	1866	15.8×244.0	一 卷 紙本 墨画
8	愜趣帖・清娛帖	慶応3	1867	各 8.8×13.4	二 帖 紙本墨画・淡彩
9	間有趣帖	慶応4	1868	各 13.5×19.8	一 帖 紙本 淡彩
10	群卉競芳図	明治2	1869	126.5×70.4	一 幅 絹本 着色
11	菟道製茶図・粟田陶窯図	明治2	1869	各130.0×44.4	対 幅 紙本 淡彩
12	高士烹茶図	明治3	1870	146.5×51.6	一 幅 紙本 淡彩
13	小艇浮江詩書・蕉陰煮茶図	慶応元-明治7頃		各102.5×25.6	対 幅 紙本墨書・淡彩
14	蔬菓図	慶応元-明治7頃		138.2×48.1	一 幅 絹本 着色
15	陽羨清韻画冊	慶応元-明治7頃		各 21.0×28.6	一 帖 紙本 淡彩
16	陽羨茗壺帖	慶応元-明治7頃		各 24.8×27.0	一 帖 紙本 淡彩
17	蓬萊山図	慶応元-明治7頃		150.0×46.9	一 幅 紙本 淡彩
18	大田垣蓮月肖像	明治10	1877	102.5×43.2	一 幅 絹本 着色
19	通天紅葉図	明治15	1882	138.4×55.0	一 幅 絹本 着色
20	壳茶翁对客言志卷	明治17	1884	26.7×360.0	一 卷 紙本 墨書
21	煎茶聯	明治8-17頃		各130.8×16.3	対 幅 紙本 淡彩
22	景德鎮陶窯図卷	明治29	1896	16.9×637.0	二卷のうち 紙本 着色
23	茶僊溪居図	明治36	1903	147.3×50.5	一 幅 絹本 着色
24	上田秋成像 秋成稿本合装	明治28-37頃		141.2×33.0	一 幅 紙本 淡彩
25	梅溪清隱図	明治43	1910	139.3×39.9	一 幅 絹本 着色
26	高遊外売茶図	明治38-大正3頃		132.2×42.2	一 幅 絹本 着色
27	梅山幽趣図	大正4	1915	130.0×42.0	一 幅 絹本 着色
28	猛虎図	大正6	1917	141.8×53.3	一 幅 紙本 着色
29	盧仝喫茶図	大正8	1919	42.0×50.2	一 面 絹本 着色
30	椀花山茶水僊華図	大正9	1920	47.0×57.5	一 幅 絹本 着色
31	東坡煎茶図	大正10	1921	133.0×32.6	一 幅 紙本 淡彩
32	陸茶僊品水図	大正11	1922	133.0×32.4	一 幅 紙本 淡彩
33	陸羽茶癖図	大正13	1924	133.9×33.5	一 幅 紙本 淡彩
34	繪島図・煎茶図	大正13	1924	各 65.8×20.6	対 幅 紙本 墨画
35	富岡鉄斎書簡 大田垣蓮月宛	慶応元	1865	15.8×164.4	一卷のうち 紙本 墨書
36	富岡鉄斎書簡 大田垣蓮月宛	明治初		14.7×52.3	一卷のうち 紙本 墨書
大田垣蓮月・富岡鉄斎合作					
37	煎茶図	慶応2	1866	129.0×28.7	一 幅 紙本 墨画
38	藤娘図	慶応2	1866	121.5×40.8	一 幅 絹本 着色
39	狸図	慶応2	1866	36.3×52.8	一 幅 紙本 淡彩
40	松雪図	慶応3	1867	112.3×29.5	一 幅 紙本 淡彩
41	菖蒲図	慶応3	1867	115.5×30.7	一 幅 紙本 淡彩
42	奴図	慶応3	1867	113.8×47.0	一 幅 紙本 淡彩
43	人勝図	慶応4	1868	106.9×35.9	一 幅 絹本 淡彩
44	花瓶図	明治2	1869	135.5×30.6	一 幅 紙本 墨画
45	松図	明治2	1869	135.4×19.5	一 幅 紙本 墨画
46	蓮月・鉄斎合作扇面画帖	明治3	1870	各 18.0×51.0	一帖(扇面) 紙本 着色

47	桜花図	明治4	1871	127.2×39.6	一 幅	紙本 淡彩
48	野遊賞月図	明治6	1873	15.3×44.8	一幅(扇面)	紙本 墨画
49	秋草図	慶応元-明治7頃		33.0×49.0	一 幅	紙本 着色
50	菊図	明治8	1875	13.0×37.9	一 扇	紙本 淡彩
51	桃花図 蓮月短冊貼交	大正9	1920	52.0×58.6	一 幅	紙本 淡彩

周辺の人々(鉄斎旧蔵品)

番号	名 称	作 者	制 作 年	法 量	員 数	材質・彩色	
52	小沢蘆庵像	小沢蘆庵賛	江戸後期	106.1×38.7	一 幅	絹本 着色 紙本 墨書	
53	和歌一枚起請文	小沢蘆庵	江戸後期	38.0×53.5	一 幅	紙本 墨書	
54	贈蓮月老人詩書	羅溪慈本	安政2	1855	99.1×27.0	一 幅	紙本 墨書
55	為蓮月老尼詩書	田辺玄々	安政2	1855	100.7×30.2	一 幅	紙本 墨書
56	記烈婦蓮月事・送別和歌合装	林鶴梁 大田垣蓮月	明治7	1874	23.6×8.5 23.4×42.6 30.0×44.3 35.3×5.7	一 幅	紙本 墨書
57	芦雁図	田結莊千里	明治26	1893	112.8×58.4	一 幅	紙本 淡彩

[器 物]

番号	名 称	作 者	制 作 年	法 量	員 数	
大田垣蓮月(No.58,66,78,81以外は鉄斎旧蔵品)						
58	煎茶碗	初代 浅見五郎介 大田垣蓮月	慶応3	1867	各 4.6×7.3×7.3	五 客
59	茶碗	大田垣蓮月	明治2	1869	6.5×12.0×12.0	一 口
60	陶瓢	大田垣蓮月	明治3	1870	18.6×10.2×10.2	一 口
61	建水	大田垣蓮月	明治4	1871	12.7×11.8×12.3	一 口
62	急須	大田垣蓮月	明治7	1874	9.5×15.5×15.5	一 口
63	急須(松傘摘)	大田垣蓮月	明治8	1875	5.3×8.5×8.5	一 口
64	土塀	大田垣蓮月	明治8	1875	9.0×17.2×17.2	一 口
65	德利	大田垣蓮月	江戸末-明治初		16.8×14.7×14.7	一 口
66	德利	大田垣蓮月	江戸末-明治初		15.2×14.3×14.3	一 口
67	藤娘図德利	大田垣蓮月	江戸末-明治初		12.3×7.5×7.5	一 口
68	大急須	大田垣蓮月	江戸末-明治初		11.2×20.1×16.9	一 口
69	小急須	大田垣蓮月	江戸末-明治初		6.5×8.1×8.1	一 口
70	湯ざまし・盃	大田垣蓮月	江戸末-明治初		湯ざまし:4.1×6.5×6.5 盃:2.8×6.1×6.1	二 口
71	秋草図煎茶碗 茶碗筒 鉄斎絵	大田垣蓮月	江戸末-明治初 大正11	1922	茶碗:各3.6×5.8×5.8 筒:12.7×7.9×7.9	五 客 一 口
72	香炉(木蓋付)	大田垣蓮月	江戸末-明治初		9.9×11.2×11.2	一 基
73	香炉	大田垣蓮月	江戸末-明治初		7.1×7.8×10.2	一 基
74	土釜(木蓋付)	大田垣蓮月	江戸末-明治初		13.8×19.4×19.4	一 口
75	磁鉢(別蓋)	大田垣蓮月	江戸末-明治初		7.5×16.1×16.1	一 口
76	磁鉢 鉄斎絵塗蓋付	大田垣蓮月	江戸末-明治初		13.6×19.3×19.3	一 口
77	香合	大田垣蓮月	江戸末-明治初		8.2×5.2×5.2	一 合
78	亀香合	大田垣蓮月	江戸末-明治初		3.1×7.1×4.9	一 合
79	捏土挿花器	大田垣蓮月	江戸末-明治初		19.0×9.7×8.8	一 口
80	土器皿	大田垣蓮月	江戸末-明治初		各 2.3×10.4×10.4	六 枚
81	酒盃	大田垣蓮月	江戸末-明治初		5.0×6.0×7.4	一 口
富岡鉄斎						
82	寿字陶鼎	初代 浅見五郎介	慶応3	1867	22.5×24.4×24.4	一 口
83	人物絵染付火鉢	初代 浅見五郎介	慶応3	1867	23.4×22.9×22.9	一 口
84	歳寒二友図瓶懸火炉	初代 浅見五郎介	慶応3	1867	32.0×23.0×23.0	一 基
85	瓢德利 銘雖小		明治33	1900	15.0×8.0×8.0	一 口
86	十友図菓子盆		明治28-37頃		各 1.3×13.7×13.7	十客のうち
87	仿漢鼎式東山窯香炉	四代 高橋道八	明治28-37頃		13.5×11.2×8.0	一 基

88	菟道真景詩画器局	中島菊齋	明治38-大正3頃		47.5×45.3×29.0	—	基
89	手提香炉		明治38-大正3頃		14.8×13.3×13.3	—	基
90	朱竹絵幡		明治38-大正3頃		72.5×31.5	—	面
91	四君子絵桐茶壺	中島菊齋	大正4	1915	各11.4×7.8×7.8	—	双
92	松竹梅靈芝絵料紙文庫	中島菊齋	大正4	1915	硯箱 5.4×22.7×25.9 文庫13.7×34.0×41.5	—	組
93	木製聯		大正4	1915	各85.5×18.0	—	対
94	中国製小囊		大正4-13頃		11.5×14.0×7.5	—	口
95	茶量(竹製)		大正4-13頃		2.0×4.8×12.1	—	個
96	朱竹絵網代盆		大正4-13頃		37.0×23.6×2.9	—	枚
97	円形茶壺	陶:二代 三浦竹泉 錫:二代 秦蔵六	大正5	1916	各10.0×5.3×5.3	—	双
98	歳寒三友図炉屏		大正5	1916	31.5×72.2×72.2	—	隻
99	松芝不老絵文台	中島菊齋	大正5	1916	10.3×57.5×35.8	—	台
100	魚形巾台	富岡鉄齋	大正7	1918	2.8×10.9×5.6	—	個
101	仿銅器式桐香炉	木器:中島菊齋 銀火舎:三代 秦蔵六	大正8	1919	7.2×10.2×7.8	—	基
102	蓮月幽居図四方釜 大田垣蓮月歌賛	三代 高木治良兵衛	大正9	1920	28.4×22.7×20.3	—	口
103	高遊外詩画染付菓子鉢	初代 諏訪蘇山	大正10	1921	8.8×18.4×18.4	—	口
104	瓢絵炉屏		大正10	1921	29.0×93.0×93.0	—	隻
105	蘭菊図器局		大正10	1921	36.3×38.5×24.5	—	基
106	扇式菓子器	中島菊齋	大正11	1922	7.5×32.5×27.4	—	口
107	松芝不老絵長方盆		大正11	1922	39.0×25.3	—	枚
108	蘭絵手提		大正12	1923	27.4×19.0×19.0	—	口
109	鴨川眺望図煎茶椀	富岡鉄齋・春子合作	大正12	1923	各 4.3×7.4×7.4	五	客
110	傳窠書壳茶式器局	中島菊齋	大正13	1924	55.6×26.7×27.6	—	基
111	宝珠絵楯	中島菊齋	大正13	1924	6.6×7.7×14.4	—	個
112	仿銅器式桐香炉	中島菊齋	大正13	1924	24.0×25.0×20.0	—	基
113	煎茶皆具のうち		明治45-大正13頃			—	一式のうち

・出品作品は期間中下記の通り2回にわけて展示します。但し一部作品は重複することがあります。
前期 1月8日(金)~2月7日(日) 後期 2月10日(水)~3月14日(日)

・下記の日程で学芸員による展示説明会を行います。
1月16日・30日、2月20日、3月6日 各土曜日午後1時30分より

・次回展覧会 「鉄齋美術館開館35周年記念特別展」

前期:鉄齋の富士 3月18日(木)~4月11日(日)
後期:鉄齋—豊潤の色彩— 4月14日(水)~5月9日(日)

清荒神清澄寺 鉄 齋 美 術 館 〒665-0837 宝塚市米谷字清シ一番地
TEL (0797) 84-9600
FAX (0797) 84-6699
<http://www.kiyoshikojin.or.jp>